

### 国づくりには 先方政府との信頼関係がカギ

JICA 東南アジア・大洋州部で東ティモールを担当する林径子さん。現地政府と日本が二人三脚で進める「国づくり」の醍醐味を感じながら、新たな一歩を踏み出そうとするこの国の開発を支援している。

## 大

学ではマーケティング論を専攻し、卒業論文のテーマは「企業の社会貢献活動」でした。企業の社会的責任（CSR）が、日本ではまだそれほど浸透していない時代でしたが、何らかの形でその分野の仕事に従事したいと思っていたのです。

卒業後は印刷会社に就職し、パッケージの企画・製作を担当しました。パッケージは商品のメッセージを効果的に消費者に伝える重要なコミュニケーションの手段です。その仕事の意義は十分に理解していましたが、ある時ふと「私が汗水流して作ったものはすべてゴミになる」と思った瞬間、一切のことが空しく思えてしまったのです。

もう一度原点に戻り、自分の生き方を見つめなおしたい。そんな思いから復学を決定し、大学院で広報を専攻しました。CSRの研究を通じて、行政でも民間企業でもない、NGOなどを主体とする第三セクターが存在することを初めて知り、東京に拠点を置くある国際協力NGOと出会ったのはそのころでした。「日本が国際協力に携わることの意義を日本国民に広く伝えたい」という思いからそのNGOに就職。それが、私の国際協力キャリアの出发点です。

NGOでの10年間は無我夢中でしたが、異なる環境でもっと経験を積んで成長したいという思いが強くなり、2006年に

国際協力銀行（JIBC）に転職しました。国際協力の根幹の精神はNGOもODAも同じですが、当時のJIBCの仕事はよりダイナミックで、我を忘れて仕事に没頭していました。

09年4月からは、現在の部署で東ティモールを担当しています。シャナナ・グスマン首相が来日し、東ティモールが初めて日本に円借款供与の要望を出したタイミングでの配属でした。「無償資金協力は自分たちよりももっと困っているアフリカのために」、「借款供与は国の経済が世界的な信用を得たことの証し」などという先方の意向をくみ、その実現可能性を検討することになりました。新規に借款をつける仕事には職人技が求められますが、当時まだ経験の少なかつた私にとっては、苦勞を強いられる日々でした。

円借款供与には、ある一定の条件と環境が必要になります。JICAは現地調査を経て9つのステップを洗い出し、先方政府とともに借款供与までのロードマップを作成しました。現地の財務省と議論を重ね、「私が東ティモール議会の承認をとりつけるから、ハヤシは日本政府の承認をもらつてくれ」など、二人三脚で一つずつ条件をクリアしていきました。真剣勝負で衝突もよくありましたが、それがさらに信頼関係を深めてくれました。そしてこの3月には、東ティモールにとって世界初の借款と



JICA 東南アジア・大洋州部  
東南アジア第六・大洋州課

林 径子  
HAYASHI Michiko

大学卒業後、民間企業に就職。退職後アメリカの大学院への留学を経て、日本のNGOに就職。10年間勤務した後、2006年に国際協力銀行に転職し、開発二部三班（当時）で南アジアを担当。08年10月のJICAとの統合後、南アジア部に配属。09年4月から現職。



東ティモール初の円借款対象となった国道1号線の測量調査に参加する林さん（左）

なる円借款貸付契約がようやく締結されました。

どんな仕事をする時も、「担当する国、セクター、プロジェクトは、自分が誰よりも詳しいと言えるくらいに徹底的に勉強しろ。それがプロだ」というある先輩の言葉が胸に刻まれています。それが私のモットーであり、後輩にも伝えていきたいJICA職員としての生き様です。

国際協力は、日本が存在する、証しです。これからもJICAがさらに前進を続け、ODAを通じて日本としての新しい付加価値を生み出せるよう、私自身も努力と挑戦を続けていきたいと思えます。



東ティモールのインフラ省ペドロ・ライ・ダ・シルバ大臣と会談。顔を合わせて議論を重ねることが、信頼関係の構築にもつながる